

日本政治学会 会報

The JPSA News

NO.8

October 1984

ご あ い さ つ

西 川 知 一

このたびはからずも日本政治学会の理事長に選任され、大へん光榮に存じています。もとよりその任に値しないことはよく存じておりますが、ひとたび選任されました上は、会員皆さんの御協力をえて、学界の発展のために微力をつくしたいと思っています。会員皆さんの御支援をおねがい申し上げます。

現在、政治学会は当面の課題として、学術会議の改組にともなう問題をかゝえており、学会としてはまずこの問題を処理しなければなりません、この問題はまた追って御報告させていただくことゝして、こゝでは小生の平素考えていることを述べさせていただいて、ごあいさつにかえたいと思います。

どの世界にもあるように、政治学の世界にも中央と周辺とがあります。政治学の世界で中央といえ、それは欧米の大国であり、日本を含めた第三世界の国々はもちろん、ヨーロッパの小国もいわば周辺の国々でしかなかったわけです。近代の民主主義がまず欧米の大国から生まれたことからすれば、このことは当然のことであったといえましょう。

しかし最近はその次第に変化してきているのではないかと思います。まず大国、とくにアメリカの政治学者が周辺の国々の政治を研究しはじめ、また周辺の国々の政治学者がその国について世界の政治学界で発言するようになってきました。小生はこの新しい傾向はひとつにはアメリカの世界政策のもたらしたものと考えていますが、それはそれとして最近とくに目立っているのは、かつての中央、周辺の区別にかゝわりなく、多数の国々の比較研究が著しく発展してきているということであり、たとえば多くの研究者が、かつての周辺の国々を含めて、数多くの国の比較研究を行い、それを通して新しい政治理論をつくらうとしています。その代表的な例

がサルトーリであります。サルトーリは彼自身がこれまで周辺視されていたイタリアの研究者であり、さらに彼の政党理論が何よりもイタリアの現実を反映しているというばかりでなく、そこで取上げられている国は日本を含めて数多くの周辺の国々を含んでいます。また一方では、中央、周辺の区別なく、多数の国々の研究者を網羅して共同研究を行うというプロジェクトがずい分増えてきているように思われます。中でも Democracies と呼ばれる20前後の国々の比較研究は最近ではひとつの流行となっている感さえあります。

このようにして最近のかつての中央と周辺の区別が次第になくなりつゝあるように思われますが、残念なことに、日本はその Democracies の国々の中に含まれながら、日本の政治についてはまだまだ世界の学界でよく知られているとはいえないし、また日本の研究者が共同研究のチームに参加するというのも数少ないように思われます。その意味では日本の政治学はまだ周辺に属しているといわねばならないようです。このことはいうまでもなく言語という障害のためでしょうが、政治学会としても何とかして取組んでゆかなければならないところに来ているように思われます。そのための方法としては、年報を季刊とするとか、欧文雑誌を出すとかいろいろあると思いますが、ちょうど武者小路会員が IPSA の執行委員会で次期会長候補に選ばれた時でもあり、日本の政治学を周辺としての地位から解放するために、会員の皆さんとともにも努力したいと考えています。

学 会 ニ ュ ー ス

新執行部きまる

西川知一新理事長、犬童一男新常務理事については、すでに前年の総会において承認されていたが、このたび10月6日の総会において、今後二年間の学会運営の中心となる役員が、次のとおり決定された旨、報告された。

| | |
|--------|-----------------|
| 年報委員長 | 矢野 暢 (86年度年報) |
| | 有賀 弘 (87年度年報) |
| 企画委員長 | 田中 浩 (85年度研究会) |
| | 山川 雄巳 (86年度研究会) |
| 文献委員長 | 井田 輝敏 (84年度文献) |
| | 三谷 太郎 (85年度文献) |
| 渉外委員長 | 内田 満 |
| 選挙担当理事 | 三宅 一郎 |
| 幹事 | 五百旗頭 真、小野 紀明 |

1984年度研究会・総会

開催される

1984年度の研究会は、10月6日(土)、7日(日)の両日、新潟大学で開催された。多数の会員の参加を得て、研究会は下記のプログラム通り順調に終了した。

第一日午後1時30分より開かれた総会においては、司会の渋谷会員の開会の辞に続いて、升味理事長の挨拶があり、更に企画、年報、渉外、文献の各委員会の委員長報告がなされた。また山下監事より1983年度決算、半沢常務理事より1984年度予算(いずれも前号会報に掲載)がそれぞれ報告された。また次期理事長に代って犬童次期常務理事より、新任のメッセージが伝えられた。また学術会議会員の選出方法について、次回の理事会への一任を求める提案が犬童常務理事からあり、了承された。

また研究会第一日終了後、同大学食堂において懇親会が150名を超える会員の参加の下、盛況の中に行われた。

なお当日のプログラムは以下の通りである。

10月6日(土) 午前

共通論題

(A) “新冷戦”と世界の軍事化

| | |
|-----|-----------------|
| 司会 | 高柳 先男(中央大) |
| 報告 | 進藤 栄一(筑波大) |
| | 「軍産複合体——米ソの場合」 |
| | 佐藤 幸男(広島大) |
| | 「第三世界の政治文化と軍事化」 |
| 討論者 | 多賀 秀敏(新大) |
| | 鴨 武彦(早大) |
| | 佐々木 毅(東大) |

分科会 午後

(A) 政党制再編成の理論と実際

| | |
|-----|---------------------------------|
| 司会 | 内田 満(早大) |
| 報告 | 加藤 秀治郎(京産大) |
| | 「西ドイツにおける政党制の発展 ——投票行動との関連で」 |
| | 砂田 一郎(東海大) |
| | 「米国における政党の影響力低下と政 党制再編の可能性」 |
| 討論者 | 岡野 加穂留(明大) |
| | 田中 善一郎(東大) |

(B) イタリア・ファシズムの成立

| | |
|-----|-------------------------------------|
| 司会 | 伊藤 照一郎(法大) |
| 報告 | 村上 信一郎(中京工大) |
| | 「戦後の政党危機とファシズム」 ——イタリア人民党を中心として」 |
| | 高橋 進(佐賀大) |
| | 「農村ファシズムと国民ファシスト 党」 |
| 討論者 | 石川 捷治(九大) |
| | 馬場 康雄(東大) |

(C) 明治後半期の政治思想

| | |
|-----|----------------|
| 司会 | 井田 輝敏(北九大) |
| 報告 | 坂本 多加雄(学習院大) |
| | 「山路愛山の政治思想」 |
| | 吉 剛 明子(跡見学園短大) |
| | 「海老名弾正の政治思想」 |
| 討論者 | 渋谷 浩(明治学院大) |
| | 岡 利郎(北大) |

10月7日(日) 午前

共通論題

(B) 大正デモクラシーの再検討

学 会 ニ ュ ー ス

司 会 木 坂 順一郎 (竜谷大)
 報 告 松 尾 尊 允 (京 大)
 「大正デモクラシーより戦後民主主義
 へ」
 三 谷 太一郎 (東 大)
 「権力形態としての大正デモクラシー
 —その国際政治・経済的環境—」
 討 論 者 岡 本 宏 (熊本大)
 金 原 左 門 (中 大)
 篠 原 一 (東 大)

分 科 会

(D) 連邦制の再検討

司 会 岡 村 忠 夫 (法政大)
 報 告 新 藤 宗 幸 (専修大)
 「アメリカの連邦制」
 田 口 晃 (北 大)
 「スイスの連邦制」
 討 論 者 神 江 伸 介 (香川大)
 河 合 秀 和 (学習院大)

(E) 政策過程と官僚制

司 会 大 森 彌 (東 大)
 報 告 今 村 都南雄 (中 大)
 「政策過程と官僚制」
 川 野 秀 之 (玉川大)
 「比較官僚制研究の新動向
 —ミンガン大学比較エリート
 プロジェクトをめぐる—」
 討 論 者 村 松 岐 夫 (京 大)
 牧 田 義 輝 (東海大)

(F) ロシア、中国の政治思想における西欧モデル

司 会 田 中 治 男 (東外大)
 報 告 竹 中 浩 (大阪大)
 「近代ロシア思想とヨーロッパ」
 佐 藤 慎 一 (東北大)
 「中国における西洋モデル成立の諸前
 提」
 討 論 者 松 沢 弘 陽 (北 大)
 池 庄 司 敬 信 (中 大)

次期企画委員会のメンバー決まる

85年度企画委員は下記の各会員に委嘱されることにな
 った。

| | |
|-----|-----------------------|
| 委員長 | 田 中 浩 (一 橋 大) |
| 委 員 | 太 田 一 男 (酪農学園大学) |
| 〃 | 佐 藤 慎 一 (東 北 大 学) |
| 〃 | 佐々木 毅 (東 京 大 学) |
| 〃 | 大 森 彌 (東 京 大 学) |
| 〃 | 本 田 弘 (日 本 大 学) |
| 〃 | 岡 沢 憲 芙 (早 稲 田 大 学) |
| 〃 | 小 野 修 三 (慶 応 大 学) |
| 〃 | 北 岡 伸 一 (立 教 大 学) |
| 〃 | 江 川 潤 (中 央 大 学) |
| 〃 | 土 生 長 穂 (法 政 大 学) |
| 〃 | 安 世 舟 (大 東 文 化 大 学) |
| 〃 | 加 藤 哲 郎 (一 橋 大 学) |
| 〃 | 奥 田 和 彦 (国 際 大 学) |
| 〃 | 和 田 守 (静 岡 大 学) |
| 〃 | 小 野 耕 二 (名 古 屋 大 学) |
| 〃 | 西 田 毅 (同 志 社 大 学) |
| 〃 | 小 野 紀 明 (神 戸 大 学) |
| 〃 | グレン・フック (岡 山 大 学) |
| 〃 | 前 田 繁 一 (松 山 商 科 大 学) |
| 〃 | 藪 野 祐 三 (北 九 州 大 学) |

次期文献委員会のメンバー決まる

85年度文献委員は下記の各会員に委嘱されることにな
 った。

| | |
|-----|-------------------|
| 委員長 | 井 田 輝 敏 (北 九 州 大) |
| 委 員 | 安 部 博 純, 山 口 圭 介 |
| 〃 | 山 崎 克 明, 藪 野 祐 三 |
| 〃 | 村 上 芳 夫, 辻 中 豊 |
| | (以上, 北九州大) |
| 〃 | 初 瀬 龍 平 (神 戸 大) |
| 〃 | 小 沼 新 (宮 崎 大) |
| 〃 | 石 川 捷 治 (九 州 大) |
| 〃 | 高 橋 進 (佐 賀 大) |
| 〃 | 森 康 博 (東 亜 大) |

以 上

理事会記録から

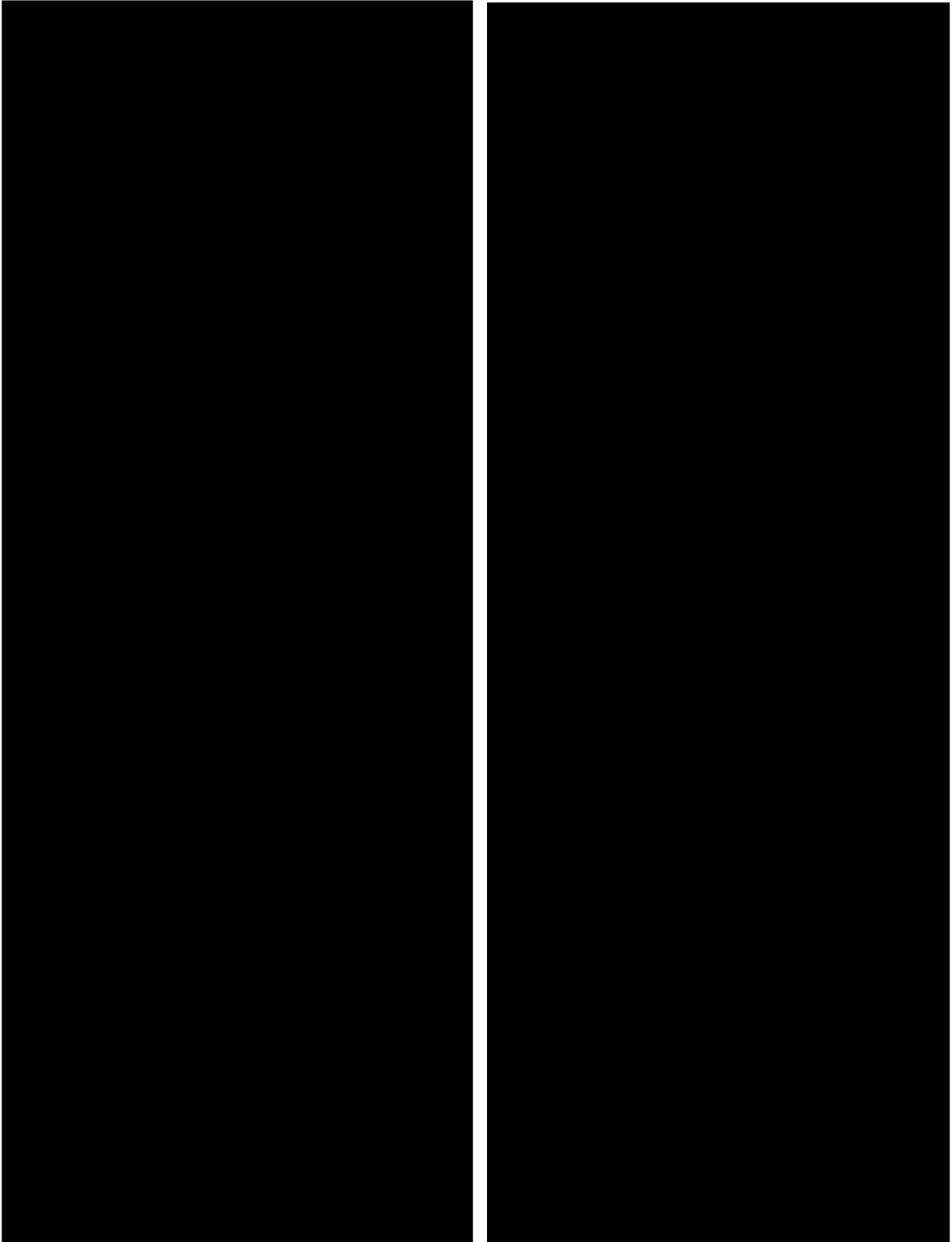
〔次期理事会〕 1984年6月9日 京都大学会館

- 西川次期理事長から、次期委員長人事について提案があり、承認された。
- 1986年度研究会を龍谷大学において開催することが決定された。
- 内田理事より、次期 IPSA 会長に武者小路理事が就任する可能性が高くなった事情について説明があり、その場合の本学会との関係につき意見交換がなされた。

1984年10月6日 新潟大学

- 西川新理事長の病状と伝言につき、犬童常務理事から説明があり、常務理事が本理事会の司会を代行することが了承された。
- 犬童常務理事より、学術会議会員の選出方法について、新制度の概要と日程等の説明があり、流動的事態にかんがみ、次回の理事会において討議・決定するほかはない旨の提案があり、了承された。
- 升味準之輔前理事長が顧問に委嘱された。
- 1987年7月神戸において国際法哲学・社会哲学会大会が開催される。これについて現在、日本法哲学会は隣接諸学会に対して協賛を求めており、日本政治学会も応ずることとした。

会員の異動



新 事 務 局 か ら

事務局が神戸大学に移りました。

早く慣れて、学会活動全般に対応できるよう、都立大学からノウハウを譲り受けながらの学習中です。平時の仕事のほかに、学術会議会員が学会推薦方式に変わったことに伴う書類作成事務が増えるものと予想されます。皆様の御協力と御指導をお願い致します。

犬童常務理事のもと、五百旗頭、小野各幹事が事務を分担する体制をとろうとしています。どこの大学にも教官のメール・ボックスがあると思いますが、神戸大学法学部では政治学会用のボックスをも備けてもらいました。皆様からの事務局宛の郵便はそこに落着くことになります。とくに執務日等は定めず、適宜対応したいと思います。

また皆様からの電話は、とくに御指名がない場合には、法学部の庶務掛（内線3013）につながり、そこから私どもに回されると思います。私どもが不在の場合は、メッセージを残していただければ、やはり学会用ボックスに落着きます。

では、これから二年間、よろしくお願い致します。終りに、これまで二年間を立派に務められた都立大学事務局の御尽力に感謝と敬意を表したいと思います。

(M. I.)

1984年10月31日

発行 日本政治学会事務局

犬童一男

〒657 神戸市灘区六甲台町

神戸大学法学部内

TEL (078) 881-1212(内線3013)

郵便振替番号 東京 0-84250

加入者名 日本政治学会